

「深い暗闇の中へ」

詩篇 第103篇 20節～22節
ルカによる福音書 第2章 8節～21節

説教 岡村 恒 牧師

この夜、羊飼いたちを取り囲んだ光の中で、宇宙全体を揺れ動かすようなみ使いたちの讚美の音が響きました。

聖書は、一番最初の頁でこの暗闇を描きます。神がおられる世界でありながら、まだ秩序の無い《混沌》があふれる暗闇がありました。ドイツの宗教改革者、マルティン・ルターはこの暗闇について多くを語りました。ドイツ語で混沌のことをカオス(caos)と言い、本来あるべき秩序からはずれたものはいつでもカオス(混沌)の中にあると言うのです。

この暗闇、カオスの中で、天地創造の第一日に響いた言葉は、「光あれ」でした。秩序無き暗闇に、神の光が照り輝いたのです。今では人間の知識も聖書に追いついてきて、このはじまりをビッグバンと呼ぶようになりました。この世界は、神の「光あれ」という言葉によって創られたのです。(創世記 1章3節)

あの夜、羊飼いたちは暗闇の中で、野宿をしながら羊の番をしていました。暗闇の中で、身を寄せ合うようにして寒さに耐えていた彼らを、まばゆい光が包み込みました。聖書は私たちのことを、暗黒に住む者、暗闇の中をうごめく民と呼びます。そしてやがて、暗闇の中へと滅び去って行く者だと言います。

一方、町には灯りがともり、暖かい部屋がありました。羊飼いたちは、自分たちだけがこの深い暗闇と絶望の中に居るのだと思っていました。しかし彼らに、驚くべき知らせが語られたのです。客間に居る余地が無い赤ちゃんの誕生の話です。しかしこれが、すべての人々のための救いのしるしでした。あの町の、明るい光の中に居る人々、すべての人の絶望的な一番深い闇の中に、救い主がお生まれになったのです。

羊飼いたちは、この知らせが本当だということを知って、もう黙っていられなくなりました。神が、確かにこの私たちをご覧下さって、み心に留めて下さった。お約束の通りに、み使いたちが告げた通りのことが起こったことを目にし、神の光が射し込んだことを知ったからです。

神の光は、人間の手による偽物の光とは異なります。永遠の変わることのない光が、この夜、羊飼いたちを照らしました。主イエスにお会いして、あの天のみ使いたちが語り、歌ったことがひとつ残らず真実であったことを確認して、彼らは喜びにあふれました。

この世界を覆い尽くす暗闇の中に、神の音が響きました。「光あれ」と。天地創造の第一日の出来事が、クリスマスの夜にもう一度、新しく起こりました。神の光が、混沌と無秩序の暗闇を引き裂いて、新しい世界を創り始めたのです。今日、この聖堂で行われる洗礼礼典でも同じことが起こります。罪人として滅び者が、洗礼によって神によって新しく創り変えられ、新しく生きる者として光の中に移されるのです。

現在、世界中で人々は暗闇の中で絶望しています。争いや災害、混乱の中であのカオス(混沌)の暗闇が自分を覆っていることを知って、大きな恐れに直面しています。しかしこの闇の中に神の光が照り輝いています。ひざを抱えてうずくまっている羊飼いたちの暗闇で天のみ使いたちが良い知らせを語ったように。私たちの日常生活の中に、神の言葉が響いています。「光あれ」との言葉が、私たちを今日、新しく創造します。

最初のクリスマスに響いた「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」(14節)という讚美歌が、今も私たちの上から響いています。「み心にかなう人々」という言葉は別の翻訳では、「神に愛されていることを知る人々」とも訳されます。神に愛される資格があるとか、神に喜ばれるような人になる、という話ではなく、暗闇の中でうずくまっているそのままに神に愛されている人、つまり私たちのことです。

今年最後の日曜日に、私たちは一つのことを聞き取って帰ります。クリスマスの知らせ、救い主の誕生が、「わたしのため」だということです。天の御使いは言いました。「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。」(10節)

今日、聖堂を後にする私たちの姿は、あの夜の羊飼いたちの姿と重なります。神がお語り下さったことが全て真実であると知ったからです。神の救いの約束が、確かに成就したことを知って歩み出すからです。

神の目には、私たちはもはや暗闇の中をうごめく者ではなく、新しく創られ、光の中を歩む者として映っています。今日、私たちも羊飼いたちのように、暗い空に輝く星々のように輝く姿で、救い主の誕生を告げる喜びの足どりで、ここから歩み出して行くのです。

(記 岡村 恒)